宇野千

水西

水西書院の娘　©一九七七 検印廃止
著者宇野千代　発行者高梨茂
印刷所株式会社三陽社　製本
所協和製本株式会社　発行所
中央公論社　東京都中央区京
橋二丁目一番地　電話(〇三)
五六一局五九二一　振替東京
二―三四　昭和五十二年三月
十日初版印刷　昭和五十二年
三月二十日初版発行

目次

水西書院の娘　五
チェリーが死んだ　一三九
よよと泣かない　一六九
神さまはゐるか　一七七
あとがき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

水西書院の娘

カバー画　青山二郎

水西書院の娘

1

「あれは水西書院の娘でよ。」正子の姿を見ると、町の人はさう言つた。子供の頃には正子は、さう言はれるのを聞くと、何となく自慢に思つた。自分は水西書院の娘だ、とさう思つた。しかし、いまは違ふ。町の人のその言葉の中には、言葉の表面には現はれてゐない、或る軽侮の気持があつたのだと思ふ。水西書院はもと、町の藩主の学問所として建てられた邸で、間数は二階の三十畳敷きの広間を入れて、二十一ほどある。庭は千坪を越す。その庭の手入れをするために、邸の裏手に、植木屋の家族が住む小さな家屋がある。町の中央を流れてゐる大きな川の西側の淵にある、町で一番眺望の好いところ、と言はれる箇所に建てられた、学問所と言ふよりも、別邸である。ここで藩主たちは、月見や花見をしたのだと、正子は聞かされてゐた。

この家を、正子の父が買ひとつたのは戦後のことである。正子の父は「吉亀」と言

ふ、近在に聞えた芸者の置家で、以前は、町の大名小路と新町との間の横町で営業してゐた。さう言ふ前歴の者が、藩主の別邸を買ひとることには問題があつた。話が決まるまでには時間がかかつたと言ふことである。

水西書院に移るとすぐ、稼業は弟の鶴三に譲つて、自分は「無職」と称した。しかし、無職ではない。以前から手掛けてゐる株の相場を張つてゐる、と言ふ人の噂であつた。亀二と呼ぶこの父が、「吉亀」の若い芸者の染吉に正子を生ませたのは、戦後十年も経つてからのことである。亀二は正子が生れてからも、染吉を水西書院には決して入れなかつた。乳母を置き、家庭教師と称する中年の女を一人置いた。正子が「お母さん」と呼んでゐる亀二の老妻は、だから、正子にとつては継母であるが、よく出来た女で、正子を自分のほんたうの娘のやうに、いや、或ひはそれ以上に大切にして育てた。正子は亀二が老齢になつてから生れた、たつた一人の子供であつたので、この家では、正子を大切にするあまりに、どうかすると、父親の亀二までが、甘やかして育てたと言ふ。以上が正子と言ふ娘の育つて来た環境である。いまになると、町の人たちの正子に対する言葉の中に、幾分かの軽侮の念がある、と正子が思つたのは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

以上のやうな環境のせゐである。

水西書院の裏に住んでゐる植木屋は、「植定」と呼ばれてゐる、腕の立つ庭師である。そこが藩主の別邸であつた頃から、いや、もつと前から、父祖代々に勤め上げて来た庭師で、定吉と言つた。この定吉に息子が一人あつた。直吉と言つた。人の顔を見ると、につと眼もとだけに笑みを浮べるが、あまり口を利かない。顔つきも、植木屋の息子のやうではない。「水西書院の植木屋の息子ぢやもの。まるで、殿さまのやうな顔をしとる、」町の人はさう言ふ。利発で、何でも出来るが、不思議なことに、何でも出来ると言ふ顔はしてゐない。何となく、ぼんやりしてゐる。「この子は大物になるぞ。」と言ふのが亀二の口癖で、自分の娘である正子に次いで、この植木屋の息子を可愛がつた。

正子が五歳、直吉が七歳のとき、亀二は定吉を説き伏せて、直吉を自分の家の養子にし、行く末は正子と娶はせて、水西書院の跡目を継がせることにし、その盃をさせた。この話のあつたとき、定吉がどんなにこのことに抵抗したことか。定吉とその女房のお梅とは、お梅の生れ故郷の玖珂村の山奥まで、直吉を連れて逃げよう、と言つ

た。しかし、定吉には、父祖代々の仕事場である水西書院を離れる決心がつかなかつた。間に這入つて、町役場の人が話をまとめた。この祝ひの日の酒盛は、いまだに、町の語り草になつてゐるほどである。

酒盛のあつた翌日から、直吉は水西書院の方へ移された。「直吉つあん、嬉しからうなう、」と家庭教師の女が言つた。直吉はいつものやうに、につと眼で笑つた。「子供でも、嬉しいのが分るのかいなう、」とその女が言つた。女には、直吉の笑顔が、いつでも何か嬉しいことのあるためのもの、と思つてゐると見える。

来たその日から直吉は、水西書院の広い家の中を、正子にひき廻されて一緒に遊んだ。父母のゐる裏の家へ帰りたい、とは言はなかつた。「当り前ぢやよ。あの小屋の中にゐるよりも、ここにゐる方が何ぼうええか。」と女たちが言つた。実際にも、正子と遊んでゐる直吉は、愉しさうに見えた。しかし、見えることがそのままほんたうではないこともある。

直吉と正子とは、よく邸裏の溝川へ、「ねんぶう」と呼ばれてゐる小魚をとりに行くことがある。水の中へ這入つて、笊で魚をしやくふのは直吉で、笊からバケツの中

へ魚を入れるのは正子である。正子はピチピチ跳ねる魚を、ぎゆつと手の中に握つてバケツへ移すとき、きやつきやつと叫んで喜ぶ。やがて、この子供たちは、溝川の上の橋桁に列んで腰をかけ、はやを釣るやうになつた。七歳や八歳の子供が、釣りの名手だと言ふことを、大人は信じない。しかし直吉は、一日の中に、びく一ぱいのはやを釣り上げる。釣り上げた魚を針から外して、びくの中へ入れるのは正子である。小魚の肌のぬるぬるした感触を、正子は決して気味悪るがらない。「直吉。今度のは、米村先生みたいな顔しとるでよ。」と言つたりして、また、きやつきやつと笑ふ。米村先生と言ふのは、正子の家庭教師の名前である。

この二人は、また、家の中でもよく遊ぶ。二階の広間で直吉が馬になり、正子が上に乗る。「直吉、駈けれ。もつと駈けれ。」と言つて、正子は直吉の尻を叩く真似をする。以前の藩主の庭園が、いまは、町の公園になつてゐる。その公園の濠端で、毎年、春秋に競馬が催される。そのときの競馬の真似をして、遊ぶのであつた。いまになつて思ひ出すと、あの子供の頃の直吉が、正子にとつては一番に懐しく、気心が分つてゐたやうな気がする。

あれは直吉が九歳のときであつた。正子が七歳であつたから、町の小学校へ上つたのは、その前の年である。いつでも二人は、同じ時間にわが家を出る。大きな流れの上にかかつてゐる、臥龍橋と呼ばれてゐる橋の上に出る頃になると、川西から来る生徒と横山から来る生徒とが一緒になつて、橋の上は、学童の姿で一ぱいになる。中には悪童もゐて、正子と一緒にゐる直吉に、「やい、手前は水西書院の養子ぢやげなが、毎朝、こねに、女子のお伴をして、ええ気持ぢやらうの、」などと言ひながら、帽子を脱いで、いまにも跳びかかりさうな恰好をしたりするものがゐる。さう言ふとき、直吉は、ちよつと立ち停つて、あの、いつもの癖の、につと眼もとにだけ浮べる笑顔をしたまま、相手を真直ぐに見るのである。

直吉のこの笑顔は、言葉に直すと、「お前の言ひたいことは、それだけか。」と言ふことである。ただ、それを、相手が知らないだけのことである。直吉は眼を反らさずに、いつまでも相手を見てゐる。喧嘩になるのは、どちらかが眼を反らした瞬間である。「これ、女子の家来になつて、ええ気持かよ。」とまたもう一ぺん毒づいてから、「構まん、構まん。女子の家来には構まんど、」と言ひ捨てて、悪童の方がさきに、そ

の場から逃げて行つた。直吉は翌朝も、またその翌朝も、正子と一緒に橋を渡ることを変へようとはしなかつた。

その年の秋の或る日、直吉は真つ直ぐにわが家に帰る道ではなく、沖ノ町から土堤へ廻つて、「いが餅屋」の店へ這入り、店さきの低い上り框に腰をかけた。新町にある学校から、臥龍橋を渡つて、水西書院に帰るには、この土堤は廻り道になる。しかし、直吉は屢々、この廻り道を通つて帰ることがあつた。「いが餅屋」の前には、ついこの頃、バイパスの交叉点が出来た。

直吉はそこの道端に立つて、前の欽明路行きの十間道路を疾走する大型バスや、自動車を見るのが好きである。また、「いが餅屋」の店さきに列べてあるいが餅を、ちらと見て通るのも好きである。水西書院の邸裏にゐる頃には、母親のお梅が、よくこのいが餅を買つて来たものである。この町でいが餅を作つてゐるのは、鍛冶屋町にある店と、この土堤の店との二軒きりである。いが餅と言ふのは、粳米の粉をこねて、蒸し、臼で搗いたものをまるめて、中に砂糖を加へた潰し餡を入れ、饅頭にした上に、餅米の粒を固く蒸して、赤、黄、青の原色に染めたものを、饅頭の上一面に、ぱらぱ

らとのせて作り上げる。この餅米の粒々ののつてゐるのが、いが餅の名前になつたものであらう。ガラス蓋のある平たい箱の中に列べて、店さきに幾つも幾つもおいてあると、子供の眼を惹くに違ひないが、しかし、その日、直吉が「いが餅屋」の店へ這入つて、そこの上り框に腰をかけたのは、そのためではない。

「直吉つあん、何ぼうほど上げようかの、」奥からおばさんが出て来て、さう訊いた。この町では、どこの家の女の人でもおばさんと言ふ。お里と言ふのが、このおばさんの名前である。髪を昔風に鬢をとつて、髷をつけてゐる。年齢は五十ちよつと前くらゐに見えるが、或ひはもつと若いかも知れない。笑ふと、大きな眼が糸のやうに細くなる。顔の色は日に灼けて、渋紙のやうな色であるのに、襷がけでゐるときに見ると、腕の奥の方の肌は、吃驚するほどに色が白い。縞の着物に、昔風の黒襦子の襟をかけ、またその上から、手拭をかけてゐる。

「おばさん。」と言つて直吉は、腰をかけたまま、おばさんの顔を見上げた。「儂をこのうちの養子にしておくれんかの、」「ははははは、」とおばさんは笑つた。「直吉つあん、あんた、養子、養子ちうて、人が笑ふでよ。ここは、あねな、水西書院みたよな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com